
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ―全てを見通す氷の目―

【Nコード】

N6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら「キセキの世代」によって目立つことのなかった存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いですが、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超え、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

「誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が

一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた」

そしてもう一つ、

「公式の試合においては目立たず
華やかな記録が有るわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた」

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれませんがご容赦ください。

「こわー！ー！ー！」（前書き）

短いですが1話目投稿です。

「わーーーー!!」

―私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活動勧誘の
声飛び交っていた。

「ラグビー興味ない?!」

「日本人なら野球でしょ!」

「将棋とかやったことある?」

「水泳!チヨーキモチイイ!」

手当り次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん?ラッセル車持つてこい!それがブルドーザーでガーッと!」

「10分で5mも動けねえ…。ってか、キレすぎだろ」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。

…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした効果はなかったが。

「勧誘か・・・くだらない。部活動とは自分からやろうという気持ち
がなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のな
んと無駄なことか。」

聞こえていたら印象が悪くなりそうなセリフを平気でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。

白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃけ怖すぎて誰も近づくものはい
なかった。

「バスケ部はどこだ・・・」

「バスケ部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは・・・出身中学と動機？」

「あ、そこら辺は任意だからどっちでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まった入部届を数えていた。

「つと・・・今１０人目か。もうちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張つて有望そうな連れてきてよねー）」

「連れて・・・きました。」

と、思った直後男子部員が１人泣きながら帰ってきた。

「（連れて・・・これとるやんけー？！しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力・・・！こいつ何者！？）っで、知ってると思うけど・・・」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によって遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動揺しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ・・・！？本場仕込みってワケ。火神大我君か、タダ者じゃなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ・・・？志望動機はなし・・・？」

その呟きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどこも一緒だろ。」
そう言い捨て火神は去っていった。

「すみません、バスケット部のブースはここでもいいのでしょうか？」
「・・・あつ！ごめん。そうよこ、こが・・・」

そうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たたん声がとぎれる。

「（こわーーーー！！）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願いします。」
「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「こわーーーー！！！！あれで新入生！？」
「（虎の次は才オカミか。猛獣使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるっスよ。」
「え？あ、ごめん、ありがとう」
そう言われ紙を受取りつつ名前を確認するとそこには”黒子テツヤ”の文字。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」
と、不思議に思いつつ紙に目を通していきある1点で止まった。

「って帝光バスケット部出身！？って、さっきの白髪も！？今年1年つてことはキセキの世代の！？」

「さっきのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイ！？」

先輩に騒がれているとは露知らず渦中の1人である黒子テツヤはあ
る場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」
「すみません。」

お互いに口数が多いとはいえない2人。しばらくにらみ合って、最
初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケットを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭にでたものだ。この新設校でおまえの新しい光
を見つけられるとでも？」

「……」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせず安堵している。
これからともに頑張ろうじゃないか。」

「はい、よろしくお願いします。」

「ではまた明日。」

「さようなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじっとその場を動かないで、頭の中ではいろいろ
と考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだろう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだろう

ただなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘はきていたはずだ

僕と同じ考え？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
とっていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだろう。そう結論付けて帰路についた。

「バスケットブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思ってることじゃん。」

「そうなんだけど・・・」

「あれ？こういう考え持つてる奴って好きじゃなかったっけ？」

「なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄にはこう書いてあった。

「完全な勝利を手にするために」

くNGシーンく

「ええっ!?!」

「うおっ!?!なにになに!?!」

「ねえ、これどう思う?」

「なにになに・・・」「誠凾の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ!?!意外とロマンチスト!?!」

「しょうもない運命だわね・・・」

「わーーーー!!」 (後書き)

いかがでしたか？感想もらえるとうれしいです。

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・」
（前書き）

少し長くなりました。

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」

翌日――

体育館にて・・・

「よし全員揃ったなー、1年はそつちな」

2年生の声で順に並んでいく。

「なあ、あのマネージャー可愛くねー？」

「2年だろ？」

1年生の視線の先には昨日のショートカットの女生徒。

「けど確かに！もうちょい色気があれば・・・」

「だアホー違うよ！」

「あいて！」

バキキツと後ろから突っ込んできたのは眼鏡をかけた先輩。

・・・

「男子バスケットク、相田リコです。よろしく！」

そう言ったのはマネージャーだと思われていた彼女。

「ええ〜！！？（カントク！？）」

1年生の叫びがあがる。

「うるさい……。」

誠は不機嫌だった。

（あっちじゃねーの！？）

１年生の視線は体育館の端にいる杖をついたヨボヨボのじいさんのもとへ集まる。

「ありや顧問の武田センセだ。見てるだけ」

１年生の心情を察してか相田が言う。

動揺する１年生に相田は更なる爆弾を投下した。

「……………じゃあまずは、シャツを脱げ！！」

「えゝゝゝ！！？（なんで！？）」

「監督権限使った変態行為、なんとも嘆かわしいことだ……」
「そこおっ！！誤解を招くこと言わないっ！！」

しつかり聞こえていたようだった。

そして、言葉通り、上半身裸にされた１年生男子諸君。

はたから見れば異様な光景だ。

「……………なんだコレ……」

その言葉は至極当然な意見だろう。相田は1年生の前を歩く。

「キミちよつと瞬発力弱いね。反復横飛び20sec/50回位でしょ？バスケやるならもうチョイほしいな。キミは体力タイ、フロ上がりには柔軟して！」

次々と指示を出して行く。

「マジ・・・！？合ってる・・・」

「どゆこと！？」

「てか体見ただけで・・・？」

1年生の疑問に先ほどの眼鏡の先輩が答える。

「彼女の父親はスポーツトレーナーなんだよ」

データをとつとトレーニングメニューを作る。毎日その仕事場で肉体とデータを見続けてるうちに身に付いた特技。

【体格を見れば彼女の眼には身体能力が全て数値に見える】

「（なるほど・・・学生で監督を任される力は持っているということですか。）」

少し感心した。しかし上半身裸の男をジロジロみているその姿は、知らない人が見れば十分怪しい。

「！」

次にカントクの眼に止まったのは・・・

「・・・なんだよ？つか寒みーんだけど」

ほかの1年生に比べて頭一つ高い身長を持った男だった。

「（な、なにコレ！？すべての数値がズバ抜けてる……。こんな
の高一男子の数値じゃない！！しかもものびしろが視えないなんて・
・、これは……。天賦の才能！！うっわ生で初めて見る）」

目を光らせて涎まででていた。

「今の姿をみて変態だと思わない方が難しいと私は思う。」

「キミさつきから失礼ねっ！って、おお・・・」

「（さつきのやつと比べると若干劣るけどこっちの数値もズバ抜けてる！！のびしろも視えない……。こんな才能が2人も入ってくれるなんてラッキー♪）」

「カントク！いつまでボーツとしてんだよ！」

はつと気づいて、慌て口の端の涎を拭う。赤い目であきれたような視線を向けられ少し心が痛い。

「ごめんつつでえっと・・・」

「全員視たつしょ。そいつでラスト」

「あっそう？・・・れ？」

相田はどこか不思議そうにしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・黒子君と白崎君がこの中にいる?」

この一言に2年生は沸きだった。

「あ!そうだ帝光中の・・・・」

「え!?!帝光つてあの帝光!?!」

「黒子!!!白崎!!!」

「黒子、白崎いるー!?!」

「(あれー?あんな強豪にいたんなら視りやすぐわかると思ったんだけど・・・・)今日は休みみたいね。いーよじゃあ練習始めよう!」

「あの・・・・すみません」

そう言う相田の前には人影が・・・・・・

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・・」

・・・・・・・・・・。

「きゃあああ!?!」

その悲鳴に他の人達もそつちを見る。

「うわぁ!何?.....うおっ!?!ダレ?」

「いつからいたの!?!」

「最初からいました」

「ウソオ!!?!」

「私に至つてはさつきガン見されていたのだが.....」

「（目の前にいて気づかなかった.....!?!?.....え?今黒子つて言つた!?!ええ!?!?てゆーか.....カゲ薄つすっ!?!そしてそーいえばこの白髪赤目!!なんで忘れてた私!?!）」

「.....え?じゃあつまりコイツらが!?!『キセキの世代』の!?!」

「まさかレギュラーじゃ.....」

3人のやりとりを見ていた部員は黒子と白崎に目をやった。

そしてざわざわと騒ぎだす。

「それはねーだろ。ねえ黒子君、白崎君。」

眼鏡の先輩が2人に同意を求めた。帝光のレギュラーがここにくる

わけがないという思いか、黒子の見た目からありえないと思ったか。

「……？試合には出てましたけど……」

「控えとしてですが出ていました。」

といっ
た。

「だよなー……うん？」

「え？　・　・　・　え！？」

「え え え え
ゝ ゝ ゞ
！？」

先ほどよりも更に大きな叫びがあがる。

「信じらんねえ！！！」

「そこまで驚くことないでしょう。レギュラーでなくとも試合には出られるのですから。」

「あ、ああ……すまん」

謝りはするがどこか納得してないようだ。

「ちよっ……シャツ脱いで!!」

「え？着ちやつた・・・」

監督に言われてシャツを脱ぐ黒子。

「（身体能力をみたところで意味はないだろう、黒子の能力には関係がない。）」

そんな事を考えつつ、こちらに集まる視線を受け流す。

しばらくみていたがやっと黒子の身体検査は終わったようだ。

「（・・・・・・・・！？）オイちよつと聞きたいんだけど・・・・帝光中とかキセキのなんたらとか」

デカイ赤髪が男子生徒に何か聞いていたが興味がないので無視していた。先輩たちの話を聞いてその日は解散となった。

（MAJIEバーガー）

そこには火神がいた。・・・・トレーに山積みになったハンバーガーを持って。

「（『キセキの世代』ね・・・・・・・・・・、そいつらならもしかして・・・・」

そんな事を考えながら席につくと目の前には・・・

「ぐおっつ！？」

「どうも・・・・育ち盛りですね」

本を片手にシェイクを飲む黒子の姿があった。

「どこから・・・つか何やってんだよ？」

「ボクが先に座ってたんですけど。人間観察してました」

「（こんなのが日本一の・・・！？・・・つか、は？・・・人間観察！？）」

火神は怪訝な顔をした。

・・・

「それより、ちょっとツラ貸せよ。これ食ってから」

火神はそう言った。

（相田 said）

・・・あれはどーゆーこと？

彼は何者なの？

能力値が低すぎる・・・！！

全ての能力が平均以下・・・

しかもすでにほぼ限界値なんて・・・

白崎君ならわかるけど、とても強豪校でレギュラーをとれる資質じゃない……!!

そのことについて白崎君に聞いてみたら……

「黒子のことを言葉にして伝えてもよく理解することは不可能でしょう。実際に試合をすればすぐわかります。」

としか返ってこなかった。

一体——!?

「ストリートバスケット」

「オマエ……一体何を隠してる?」

「…….?」

「…….オレは中学2年までアメリカにいた。コッチ日本戻ってきてガクゼンとしたよ、レベル低すぎて」

黒子は不思議そうにしている。火神は黒子に構わず続ける。

「オレが求めてんのはお遊びのバスケじゃねー。もっと全力で血が沸騰するような勝負がしてーんだ」

……火神の目はまるで獣のように鋭くとがっている。

「・・・けどさっきいい事聞いたぜ。同学年に「キセキの世代」って強え奴らがいるらしいな。オマエはそのチームにいたんだろ？」

火神はそう言うと、バスケットボールを黒子に渡した。

「オレもある程度は相手の強さはわかる。ヤル奴つてのは独特の匂いがすんだよ・・・白崎つていったか？あいつはスゲー、強いやつ
の匂いがブンブンしやがる。が、オマエはオカシイ。弱けりや弱い
なりに匂いはするはずなのに・・・オマエは何も匂わねー、強さが
無臭なんだ。確かめさせてくれよ。オマエが・・・『キセキの世代』
つてのがどんだけのもんか」

火神の目はますます獣じみたものになる。

「・・・・・・奇遇ですね」

ここに来て初めて黒子が声を出した。

「ぼくもキミとやりたいと思ってたんです。1対1」

黒子が学ランを脱いだ。

そして、勝負が始まった。

――が、

「はあ！？（――しっ・・・死ぬほど弱ええええ！！！）」

黒子はシュートしても入らなかったりドリブルミスしたりあっさり
ボールを奪われたり、早い話が弱かった。

現在、火神16対黒子0

「（体格に恵まれてなくても得意技極めて一流になった選手は何人もいる。けどコイツはドリブルもシュートも素人に毛が生えたようなもん・・・取り柄もへつたくれもねえ・・・話になんねー！！！！）」

「ふざけんなよテメエ！！話聞いてたか！？どう自分を過大評価したらオレに勝てると思ったんだオイ！」

ついに火神がぶちギレた。

「まさか」

それに黒子は飄々と返す。

「火神君の方が強いに決まってるじゃないですか。やる前からわかってます」

なに言ってるんだコイツ、とでも言いたげな顔であっさりと

「ケンカ売ってるのかオイ・・・！どいうつもりだ！」

火神が怒りに震えて怒鳴る。

「火神君の強さを直に見たかったです、あと Dank も」

「...はあ！？」

そんな火神にもひるむことなく黒子は続ける。

「（つたく．．．どーかしてたぜオレも．．．。ただ匂いもしねー
ほど弱いだけかよ．．．。アホらし．．．）」

「あの．．．」

「あーもういいよ。弱え奴に興味はねーよ。．．．最後に一つ忠告
してやる」

火神は黒子を軽くあしらい荷物をかついだ。

「オマエバスケやめた方がいいよ。努力だの何だのどんな綺麗事言
つても世の中に才能ってのは厳然として“ある”。オマエにバスケ
の才能はねえ」

「．．．．．それはいやです」

「．．．．．!？」

火神の遠慮のない言葉に黒子は黙ることなく返す。

「まずボクバスケ好きなんで。それから、見解の相違です。ボクは
誰が強いとかどうでもいいです」

「なんだと．．．」

この言葉に火神は怒ったように返す。

「ボクはキミとは違う。ボクは影だ」

「・・・・・・・・・・？」

火神は言葉の意味を理解していない。

黒子はそれ以上はなにも言わずに夜道を歩いて行った――

翌日、外は雨が降っていた。

「ロード削った分練習時間余るな・・・・・・・・・・どーする？カントク」

「（一年生の実力も見たかったし・・・・）ちょーどいいかもね。5
対5のミニゲームやろう！一年対二年で」

「センパイと試合って・・・・・・・・・・！」

「覚えてるか、入部説明の時言ってた去年の成績・・・・去年、一年
だけで決勝リーグまで行ってるって・・・・・・・・・・！！！」

「マジで・・・・・・・・・・！？」

「フツーじゃねえぞソレ・・・・・・・・・・」

先輩達の実力を聞いて、一年はビビっていた。

「（・・・・・・・・・・さうして、ルーキー達はどこまでやれるかな？）」

「ビビるとこじゃねー。相手は弱いより強い方がいいに決まってん

だろ！行くぞ！！」

「何ともイノシシらしい思考で・・・」

「なんか言ったかコラァ！」

そして始まった一年対二年の試合・・・

「・・・・・・・・うおっっ」

ガッン！

「おおっ！！？」

「うわぁマジか、今のダンク」

「スゲー！！！」

一発目から火神はダンクで先制した。

「・・・・・・・・！！（想像以上だわ・・・・・・・・！！あんな粗けずりなセンスまかせのプレイでこの破壊力・・・・・・・・！！）」

「とんでもねーなオイ・・・・・・・・（即戦力どころかマジで化物だ・・・・・・・・！！）」

試合は進み現在11-8、一年がリードしていた。

「一年がおしてる！？」

「つーか火神だけでやってるよ！」

「（んなことより……クソツツ、神経逆なでされてしょーがねー……）」

火神の機嫌が悪い理由……それは。

バチッ

黒子は持っていたボールを弾かれあっさりと奪われてしまった。

このやり取りは試合が始まってからずっと続いている。

「ステイル！？またアイツだ！」

「しっかりしろー！！」

「（意味深な事喋ってた割にクソの役にも立ちやしねえ……ザコのくせに口だけ達者つーのが……）一番イラつくんだよー！！」

イライラしながら火神はジャンプしてボールを弾いた。

「（そして何だアイツはっ！試合始まってからろくに動いてねー……）この程度かつまらねえ」

火神は試合開始からほとんど動かない白崎に対して失望したようだ。

「……！！！」

「高っ・・・・・・・・」

「もう火神止まんねー!!」

「・・・・・・・・わけにはいかなーなー（怒）そろそろ大人しくして
もらおうか!」

キュツツ!!

「3人!?!」

これ以上はやらせないと火神に三人のマークがついた。なぜか顔が
怖い。

「つまらねえとは言ってくれるじゃないか・・・」

「先輩なめるなよ・・・」

「・・・・（怒）」

「ええっ!?! 違っ!（汗）」

さっきのこの程度発言で怒らせたようだ

「そこまでして火神を・・・・・・・・」

「しかも・・・・・・・・ボールを持ってなくても2人・・・・・・・・ボー
ルに触れさせもしない気だ!」

火神が押さえられた結果、試合の流れはあっという間に逆転し15
- 40と一気に点差をつけられた。

「流石先輩達……強いね」

「てゆうーか勝てるわけなかったし……」

「もういいよ……」

諦めの言葉を呟いた相手に火神は突っかった。

「……もういいって……なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」

黒子は火神を宥めるため膝カックンを実行した。

「……!?!」

「手ぬるい、後頭部にハイキックを放て」

「テメ……そして殺す気がっ!?!」

宥めるどころか更に揉め事がヒートアップした。

「なんかモメてんぞ」

「黒子か……そーいやいたな〜」

「（審判の私も途中から忘れてた……んん!?あれ?マジでいつからだっけ!?!……まさか）」

「すみません、適当にパスもらえませんか」

「は？」

「（ようやくか・・・）黒子、こっちも準備はできた。必要か？」

「・・・よろしく願いします」

「がんばれ、あと3分！」

「（てか、もらっても何がきんだよ？せめてボール取られんなよ
～～）」

ボールが黒子に手に渡った時、空気が変わり始めた。

「（この違和感はない・・・？もしかして・・・何かとんでもない事が起きてる・・・！？）」

次の瞬間、黒子が持っていたボールはゴール前にいた9番へとパスされていた。

「・・・え・・・あっ」

ボールに気づくと9番はすぐにシュートを決める。

「・・・え」

「・・・な」

「入っ・・・ええ！？今どーやってパス通った!？」

「わかんねえ見逃した!!」

その後、誰も黒子のパスは止められず流れは再び一転し始めた。

「どーなつてんだ一体!!?」

「気がつくとかパス通つて決まってる!？」

「……!!」(存在感のなさを利用してパスの中継役に!?!しかもボールに触ってる時間が極端に短い!!……じゃ彼はまさか……元のカゲの薄さを……もつと薄めたつてこと……!?)

「ミスディレクション」……手品などに使われる人の意識を誘導するテクニック。

ミスディレクションによつて自分ではなく、ボールや他のプレーヤーなどに相手の意識を誘導する。

つまり——彼は試合中『カゲが薄い』と言うよりもっと正確に表現すると、自分以外を見るように仕向けている。

「こちらも動きますか……9番、5番が4番ヘルプパスをしようとしています。4番は3Pの準備をしています、打たせないで。」

「ええっ!？」

「なっ!？」

全員が驚いた。体制を崩しながらも5番の先輩が4番へパス、4番の位置は3Pライン……驚いて打てなかったが、ほとんど当たっ

ていた。

「（・・・始まりましたか）」

「12番、後ろへパス。13番へのパスは8番からスティールを狙われています！」

自らパスを受け取り、ゴールにせまる。8番の先輩が驚いているのを見るとまた的中。

「何でわかるんだ!？」

「しかも全部!？」

「このシュートは入ります!リバウンドはいりません、戻って!」

「3Pシュートだぞ!？」

外す確率の高い3Pにも迷わず戻る指示をだす。ボールは見事ネットを通過していた

「（これが黒子と白崎の……!!）」

弱いと思っていた二人がこれ程の実力を持っていたという事に火神は驚きを隠せなかった。

「（元帝光中のレギュラーでパス回しに特化した見えない選手・・・！！噂は知ってたけど実在するなんて・・・！！『キセキの世代』幻の6人目!!そして白崎君・・・彼は多分、全てのプレイを見抜きゲームを完全に掌握する・・・『神の守護者』」

「!!」

「あッ!!」

「（しまっ……黒子のパスと白崎の指示に気をとられすぎた……!!）」

「火神!!」

火神のマークが甘くなった事により、再び火神が得点を稼ぎ44-45と一気に追いつけた。

「うわあ!!信じらんねエ!!」

「一点差!？」

「まったく、どちら片方でもシンドイのに……更に白崎も混ざるとなると（三人組んだ時のこの獰猛さは手がつけらんねーな）」

「っち!!」

「バツ……」

ボールがパスされた先には黒子が待機しており、ボールの奪取に成功した。

「うおお!!」

「いけえ黒子!!」

ゴールに近づき、黒子はシュートを決めに行く。

「勝つ………」

「無理です。」

誠以外勝利を確信したが………

ガボン………

ボールはゴールに入らなかった。

「黒子にパス以外のことを任せてはいけません」

「………だから弱ええ奴はムカツクんだよ。ちゃんと決めろ
タコ!!!」

ガンッ！

火神が最後にダンクを決めて、一年の勝利が決まった。

「うわあああ!!」

「一年チームが勝ったあ!!?」

「ははっ（まあ………味方なら頼もしい限りってことか……
……）」

こうして本日の部活は終了した。

「MAJバーガー」

「・・・・・・・・」

火神が座る席には黒子と白崎の姿があった。

「・・・・・・・・何でまたいんだよ・・・・・・・・」

「ボク達が座ってる所にキミが来るんです。好きだからです、ここ
のバニラシェイク」

「私は黒子に話があるというからつきあっているだけだ。ちなみに
これは爽健美茶だ。」

飲み物を飲みながら対応する

「どっか違う席行けよ」

「いやです」

「黒子次第だ」

「仲いいと思われんだろが・・・・・・・・」

「だって先座ってたのボク達ですもん」

「・・・・・・・・ホラよ」

火神はトレイに積み上げられたハンバーガーを二つ取り、黒子と白崎に投げ渡した。

「？」

「一個やる。バスケ弱い奴に興味はねー。が、オマエのこと、それ一個分位は認めてやる」

「……………どうも」

「悪いが私はいらない、栄養摂取にも気を使っているのね。ジャンクフードは食べる気になれん」

「どこのジジイだよ……………」

「ジジイではない！体のことを考えるのはスポーツ選手として当然のことだ！」

「夜9時に寝て、朝5時に起きて乾布摩擦する人がですか？」

「ジジイじゃねーか！！」

「……………キセキの世代」ってのはどんぐらい強えーんだよ？」

「「「？」」」

「じゃあオレが今やったらどうなる?」

「……………瞬殺されます」

「馬鹿は人に勝てん」

黒子と白崎は即答で断言した。

「もっと違う言い方ねーのかよ……おいこら、白崎!! おまえ人外のバカだと言いてえのか!? (怒)」

「ただでさえ天才の5人が今年それぞれ違う強豪校に進学しました。まず間違いなくその中のどこかが頂点に立ちます(うちも可能性がないわけでもありませんが……)」

「……………ハッ、ハハハ」

「壊れたか?」

「いいね、火イつくぜそーゆーの……………決めた! そいつら全員ぶっ倒して日本一になつてやる」

「ムリだと思います」

「冗談は髪だけにしとけ」

「うおいつ!!! って、白髪のおまえに言われたくねーよ!!」

それぞれの飲み物を飲みながら、二人は即答で言い切った。

「潜在能力だけならわかりません。でも今の完成度では彼らの足元

にも及ばない」

「今のおまえは少し高い位置にいるだけ。本物の化け物にはほど遠い」

「・・・ボクも決めました。ボクは脇役（影）だ・・・でも影は光が強いほど濃くなり光の白さを際立たせる。主役（光）の影としてボクも主役^{キミ}を日本一にする」

「私はバスケットで勝つためにここに来た。化け物には及ばないが、少しはマシなおまえが使い物になることを期待する」

「・・・ハッ、言うね。勝手にしろよ」

「頑張ります」

「わかった、勝手にしよう」

（NGシーン）

「・・・・・・・・もういいって・・・・・・・・なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」（膝カックン）

「黙れ・・・『メリッ』あっ」(膝カツクンで狙いがそれてキック
股間直撃)

「ggsgxjshびうでwkdxk1っ!!!!!!!!」

「火神イイーーーー!!!!」

「すまん・・・」

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」 (後書き)

どうでしたか？感想ももらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月24日02時47分発行